北の縄文文化回廊
に向けたクラブ活動

北の縄文CLUB
HOKKAIDO
MINAMIKAYABE

通　信

第 11 号

歴風文化賞受賞式の様子

目　次

1．はじめに　……2
2．平成20年度　活動一覧　……2
3．活動内容　……2～6
4．学習　……7
5．報告　……7～8

1．はじめに

平成20年度は北の縄文ＣＬＵＢにとって、嬉しい年でした。洞爺湖サミットに関連した事業、植樹会やフォーラムなど、参加協力できたものと思っています。さらに嬉しいことがありました。「函館歴史風土を守る会」から「歴風文化賞」を頂いたこと、さらに「北海道・北東北の縄文遺跡群」が日本の世界文化遺産候補暫定一覧表に掲載されたこと。世界文化遺産候補入りが実現することを願っておりました。これまでのクラブの活動が今回の決定に少しは役立ったものと思っております。次の21年度の活動に向けてますますのはずみがつくものと確信します。以下、20年度の活動内容を報告します。

2．平成20年度　活動一覧

活　動　日	主　な　活　動	参加人数	活動場所
４月26日	第11回「北の縄文ＣＬＵＢ」総会	20名	ホテルひろめ荘
５月18日	大船遺跡周辺清掃	10名	大船遺跡
６月１日	シーニックバイウエイ北海道洞爺湖サミット記念植樹参加	９名	七飯町
９月21日	土器づくり（エコ粘土使用）	16名	南茅部公民館
10月26日	アンギン編み	15名	南茅部公民館
11月16日	勾玉づくり	16名	南茅部公民館
２月７日	第２回キャンドルdeナイト	50名	南茅部公民館周辺

（関連活動）

４月15日（火）	函館市長と市民のふれあい懇談会	函館市
７月26日（土）	2008縄文の道フォーラム参加（事業団主催）	南茅部公民館
８月３日（日）	土器づくり参加（オニウシ縄文会）	森　町
８月17日（日）	野焼き参加（オニウシ縄文会）	森　町
８月31日（日）	アカソ・カラムシ刈り	白尻町
９月13日（土）	世界文化遺産・草の根シンポジューム参加	青　森
９月14日（日）	北の縄文文化回廊づくり推進協議会設立総会参加	青　森
９月27日（土）	NHK北海道ぶらり見て歩き取材協力	大船遺跡
11月１日（土）	縄文の森づくり植樹祭参加	大船遺跡
11月３日（月）	南茅部地区文化祭、土器・アンギン・勾玉など作品展示	南茅部公民館
１月10日（土）	ワックスキャンドルづくり	南茅部公民館
１月24日（土）	ワックスキャンドルづくり	南茅部公民館
２月20日（金）	歴風文化賞受賞	函館市五島軒

3．活動内容

（1）大船遺跡周辺清掃

５月18日（日）朝10時大船遺跡駐車場集合、春霞のかかった天候のもと国指定史跡大船遺跡の展示館や公開された竪穴住居跡周辺の清掃を行いました。

楽しそうな雰囲気

これは何かな？

（2）シーニックバイウエイ北海道洞爺湖サミット記念植樹参加

平成20年７月に洞爺湖サミットが開催されることを記念して、「シーニックバイウエイ北海道函館・大沼・噴火湾ルート」事務局の主催で、６月１日植樹ボランティアが募集されました。当クラブからは９名が参加しました。あいにくお天気は小雨の降る中、大沼公園の駐車場に集合しました。ここでバスに乗り換えて小沼湖畔へ、さらに徒歩で山に登ること約20分、目的地洞爺湖サミット記念の森に着いたのは、午前10時でした。

鍬を持つのは久しぶり

セットが乱れてハイチーズ

総勢100人を超える人達が参加していました。主催者の挨拶の後、植樹の方法など細かな説明があって、一人５～６本のミズナラの苗木とスコップを持ってそれぞれ指定された場所へ向かいました。足元はぬかるんでいるうえ、結構な急斜面で土を掘るにも一苦労、近くにいた本職の方の指導を受けて要領をつかみ、無事与えられた本数の植樹を終えました。この周辺がミズナラの森になるのはいつ頃になるのでしょう。終わった頃には雨もあがり、眼下には小沼とＪＲの線路が見渡すこ

とが出来ました。

方角としては山の南側で作業をしたようです。私たちは、もう一つのテーマである環境サミットに参加した気持ちになって山を降りました。ちなみに「シーニックバイウエイ北海道」は地域の活動団体と行政が連携して、風景はじめ自然など大切なものを守って行こうという取組みだそうです。

（内山雅子）

（3）土器づくり（エコ粘土使用）

9月21日（日）函館市南茅部公民館にてエコ粘土を使ってミニチュア土器づくりに挑戦してみました。エコ粘土は家庭のオーブンで焼いて固めることが出来る粘土です。

土器の完成です

可愛い縄文人もいます

土器を作り始めたきっかけは、北の縄文ＣＬＵＢの活動のなかで土器づくりが予定されていました。大船遺跡の住居復元工事も始まっていて、住居跡の炉に使う土器をクラブのメンバーが作ることになったことでした。壊される土器とはいえ初めて作る緊張感は今でも覚えています。クラブのメンバーの作る土器を見て真似して紐状の粘土を積み上げていく、自分が描いていたイメージよりも大きな土器になりました。今その土器は大船復元住居に、底部と口縁部を切り取った真ん中の部分だけが埋められています。

２個目の挑戦は心身ともに余裕ができ、縄文人と一緒に作っている姿を思い描きながら・・・そんな想いを馳せ・・・・昨年の文化祭に５個出展。これからの目標は地元の粘土で土器づくり教室が出来るような粘土を作ることです。縄文人にとって命をつないでいくには食料はもちろん生活用具の大切さが大船遺跡の展示物を観る度に感じ、ロマンチックに想う時と生きる厳しさを想う気持ちが交差します。

（本間）

（4）野焼き体験

縄文土器づくり大会が８月３日、道立森少年自然の家（通称ネイパル森）で開催された。主催者は当クラブの会員でもある森町在住の磯尾氏が代表を務めるオニウシ縄文会（陶芸クラブ）で、子供達の夏休みを利用して毎年この時期に行われている。参加者は森町・函館市・そして周辺の町から、年齢も小学生から大人まで総勢60人ぐらいが参加していた。私達北の縄文クラブからも８名が参加、土器づくりを通して縄文の文化を体験することができた。会場には大きな模造紙に描かれた三種類の土器が展示してあり、また中央には地元縄文会のメンバーの作品が展示されていて、これ

らを参考にヨーイドンで午前10時に土器づくりがスタートした。はじめ５キロの粘土が配られたが、大きさは無制限、人によっては高さ50センチを超える土器を作っている人もいたが、私達経験者？は遠く数千年前の祖先の生活を思いつつ、大きさにとらわれることなく自分好みの土器を作った。

もう少しで出来上がり

それから２週間の時を経た８月17日、私達は再度ネイパル森に参集し野焼きに参加した。前日までの寒々しい天気から一転、真夏の太陽の下、久しぶりに野焼きを体験することが出来た。土器を焼く時の大敵は何たって湿気、せっかく苦労して作って土器にひびが入ってはおしまい、本焼き前に土器を十分に乾燥させることが大切で、この時間には３時間以上が費やされた。地面を熱することから始まって火床のわきに土器を並べ、遠火であぶり万遍なく火が通るように最初は立てて回転させ、次に寝かせて回転させた。今度は近火で寝かせて同じように繰り返す。この作業の危険なこと、風下になると熱い熱い、髪の毛を焦がした人もいたようだ。昼過ぎ皆ひび割れもなく色も変わり乾燥は完了した。この頃､「食事の用意が出来ましたよー」と縄文会の人から声がかかる。手の空いている人から食事に呼ばれる。大きな土器を鍋代わりにして作った野菜のごった煮（通称縄文なべ)、おにぎり、うどん、数種類の野菜サラダ、ゆで卵、ゆでジャガ等、まさに縄文バイキングですっかりご馳走になった。ここで本焼きの準備にとりかかる。火床の炭をいったん片付けて土器を中央部に寝かす。火床の木を交互に組み本焼き開始、回りに温度差が出ないように土器と土器の間、土器の上や中にも薪を入れ、一気に火力を上げる。時間にして１時間で終了。ある程度火のおさまるのを待って､順次長い木の棒を土器の中に入れ持ち上げながら水を張ったバケツの中へ､ジュウッと水蒸気が上がったところで完成となる。そのつど歓声が上がる。表面は茶褐色が大部分、ところがところどころ白い部分があったり、また黒ずんだ部分が混じったものなど出来上がりはまちまち。熱い木が直接触れていた部分や炎の流れた部分などによって、出来上がりの色は違うそうだ。でもどれもこれも芸術品、縄文人の知恵に感心しながら私達メンバーも皆満足した暑い１日だった。噴火湾沿岸の縄文遺跡群の一つ、ストーンサークルを有する森町のグループとこのような実体験を通して交流を持てたことは、意義深いものがあると同時に、今後こういう機会が増えることがお互いの理解を深め縄文文化普及活動に寄与するものだと思っている。

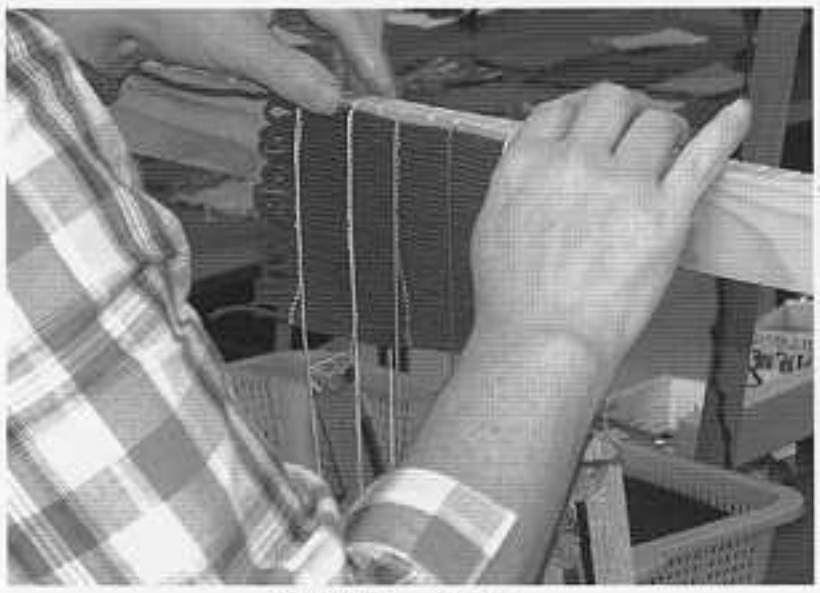
聞くところによれば今年秋には野焼きのレーンが南茅部地区にも出来るとか、是非とも実現してほしい。

（内山勝之）

（5）アンギン編み

10月26日（日）南茅部公民館にて、アンギン編みを行いました。

大きな簾にチャレンジ



私はコースター

（6）勾玉づくり

11月16日（日）南茅部公民館にて勾玉づくりを行いました。会員以外の方たちも参加され喜んでいただきました。

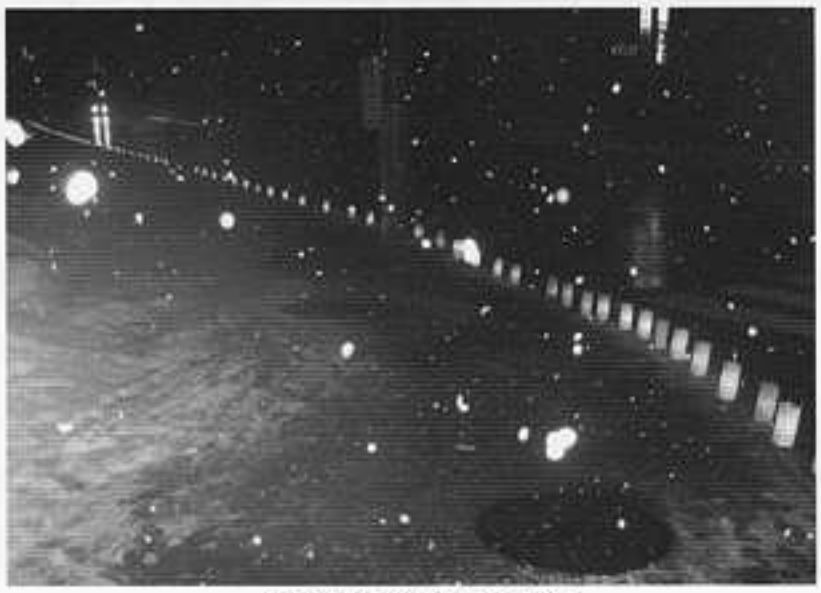
これで何個目？

記念撮影

（7）キャンドルdeナイト2009（シーニックバイウエイ北海道函館・大沼・噴火湾ルート）

２月７日（土）午後６時から８時まで南茅部公民館周辺を「キャンドルdeナイト」事業に協賛し、約200個のあかりで道を照らしました。とても幻想的で美しく道を照らしていました。今の時代も縄文時代も「あかり」のたいせつさは変わらないと思います。これからも縄文のあかりをともし続けたいと思っています。

ワックスキャンドル作り



幻想的な風景です

4．学　習

（1）ヒエ試験栽培

縄文時代に農耕が行われたかどうかは、いまだ議論されている。この時代の遺跡からアワ・ヒエなどの雑穀類の種子が発見されているのもまた事実である。確かに現・近代の栽培品の種子がネズミ・アリなどによって地中へ運ばれることもあり得る。しかし、現在の野生種・栽培種とも種子の形態が違っているものが発見されているのであれば、これは栽培されていたと、見なすほうが自然ではないだろうか。そこで、出土例が多いヒエを栽培してみることとなった。2008年５月18日、平取町二風谷産ヒエの穂がクラブ会員の小林氏によってもたらされる。当日は会員等によって大船遺跡区域内の清掃が行われ、活動の一環としてヒエの栽培を試みた。６月１日、ヒエはすでに５ミリほどの芽を出していた。７月12日に最初の草取りを行う。東側には草木が茂り日照不足のためか生育が悪い。何回か草取りを行うが栽培圃近くに生えているイヌビエはすべて抜き取った。８月20日には穂が出ている。８月30日には実際に開花も確認できた。９月14日、３割程度の登熟。穂重のためか風による茎の折れが少々ある。９月19日、茎葉が黄色みを帯びてきており登熟は5割程度。収穫予定日の９月23日は、予報通り朝９時頃から雨が降り始めたが正午までには雨は上がり秋晴れの天気に回復した。ヒエも乾いており穂の摘み取りに支障はない。午後２時から全株の８割程度の穂を収穫した。草丈の最大長は140cm以上、穂の長さ15cm・径４cmを超えるものもある。11月２日収穫最終日としたが出穂のきざしがまだあった。10月16日小林氏が平取町の関係者へ変換するための穂を、採りためておいたもののうちから選抜する。10月19日小林氏、会長が穂を平取町の関係者へ変換する。残った穂は脱粒せず、そのまま乾燥し保存することにし、来年度以降の種子用にした。返還以外の重量は、穂に付属する茎葉をふくめて、およそ2140ｇあった。今年度も試験栽培の成果をいかし、ヒエの栽培をしたいと思っている。

（平神）

手入れの様子

良く実った穂

5．報　告

（1）あおば学園

平成20年６月27日（金）午前10時から約1時間ひろめ荘会議室で、函館市内にある「あおば学園」生徒25名（父兄含め約50名）の土器づくりのお手伝いをしました。

粘土はひろめ荘で用意してくれた扱いやすいラドールという石塑土を使いました。初めて粘土に触れる人達ばかりでしたが、熱中して土器づくりをする姿に園長先生や父兄の方も感心していました。つくづく「ものづくり」は「ひとづくり」との思いをした次第です。午後は大船遺跡の見学をしました。今まで小樽など遠くまでバスで研修旅行していたようですが、地元で出来る研修を今年初めて実施したとのことでした。（桜井）

（2）歴風文化賞を頂いて

2009年２月20日、桜井会長を初め、大宮、内山、横堀の４人が、函館市末広町の五島軒で開かれた、第31回「歴史的町並み基金をつくる夕べ」というチャリティーパーティーに参加しました。このパーティーの主催者は、「函館歴史風土を守る会」で30年以上に亘って、函館西部地区を中心に、北斗市・七飯町を含む広い地域の景観や建築物の保全修復に力を注いできた団体です。その「函館の歴史風土を守る会」は昭和59年から「歴風文化賞」という賞を設け、毎年、原風景の宣言、それに保存建築物、再生保存建築物、団体、個人などの分野に分けて表彰者を選出しています。今年の歴風文化賞は、原風景として「亀田川」、保存建築物として３名の個人の邸宅、そして団体賞として「北の縄文ＣＬＵＢ」が表彰されました。「縄文の精神と文化を伝承する多彩な活動は函館の郷土文化の向上に大きく貢献しております。長年に亘り、地域に根ざした活動により、北の縄文文化を広く普及されたことに謹んで敬意を表します。」表彰理由として、このような過分な文章を頂いています。縄文という時代は、ヒトが、自然を始めとする身の回りの環境を積極的に意識し、共同体を維持することによって、子孫を繁栄させる方向を目指すようになった、おそらく最初の時代です。生まれた土地即ち郷土を強く認識した最初のヒト達だったと思います。そんな縄文人がかつてここ函館に長年存在し続けました。そして現在、彼らの遺物に興味を持ち思考を巡らす、そのような私達の活動を、「函館の歴史風土を守る会」の皆様が、歴史と風土の観点から評価され、表彰して頂けたことに、改めて御礼申し上げます。（横堀）

2009年3月31日　第11号発行
発　行　北の縄文CLUB
連絡先　北海道函館市臼尻町603-1
特定非営利活動法人
函館市埋蔵文化財事業団内
TEL　0138-25-5510
FAX　0138-25-5606